罪と死の力に打ち勝って　　マルコ 15 章 42－47 節

主イエス・キリストは、十字架につけられた後、墓に葬られました。キリスト者の信仰にとって、主イエスが墓に葬られたということは、大きな意味があります。この主イエスの埋葬はどのようにして起こったのでしょうか。その様子が、15 章の 42～43 節に書かれています。「すっかり夕方になった。その日は備えの日、すなわち安息日の前日であったので、アリマタヤのヨセフは、思い切ってピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願った。ヨセフは有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいた人であった。」とあります。この時、ユダヤの律法によれば、一刻も早く、主イエスを埋葬しなくてはいけない状況にありました。木に架けられて処刑された者の死体はその日のうちに墓に入れるなり、土に埋めるなりして葬らなければならないという定め、法律があったからです。（申命記第２１章２２節）しかもユダヤ人の一日の始まりは日が暮れてから。この時、既に、日が沈もうとしていましたからあと 2, 3 時間でその日が終わるのです。加えて主イエスが十字架につけられたのは、金曜日です。金曜の夜から律法が定める安息日が始まります。安息日には働くことが出来ませんから、遺体を埋葬も出来ない。ですから、この時少しでも早く、主イエスを埋葬しないといけない切羽詰まった状況でもあったのです。

この状況でアリマタヤのヨセフという人が主イエスの遺体を引き受けました。彼がどのような人であったのか、詳しく知ることは出来ません。もちろん、主イエスの弟子ではありません。有力な議員とありますからユダヤの国会兼最高裁判所にあたるサンヘドリンと呼ばれる最高法院のメンバーです。70 人で構成されていますがそのうちの一人です。そしてこの最高法院が主イエスを十字架につける判定を下したのです。この人はどんな人であったのでしょうか？　思いますに主イエスに親しみを持ちながらも、自らの地位や、立場上、そのことをはっきりとは示していなかった人であったのではないでしょうか。しかしこの人がすぐに、主イエスを埋葬しなくてはならないと判断したのです。律法の掟に従うためでしょうか？そんなことはありません。そういったことは他にもする人が大勢いますから敢えて彼がする必要はありません。あるいは主イエスに対して親しみを持つ善良な人がいて、その人が機転を利かせて行動を起こしたというのでしょうか。「思い切って」別訳では「勇気を出して」とありますが、身分の高い議員とは言え、ローマの総督に願い出るのは簡単なことではありませんしリスクが大きすぎます。犯罪人の仲間に見られかねませんし、同じユダヤの議員たちからすれば、自分たちが死刑を決めた主イエスを引き取った人物ということになります。議会の中での自分の地位も危うくなることだって十分あり得たでしょう。そのような危険を承知の上で、主イエスを引き受けたのです。更に、46 節には、「ヨセフは亜麻布を買い、イエスを取り降ろしてその亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納めた。墓の入口には石をころがしかけておいた。」とあります。別の福音書には、このヨセフがイエスを「自分の新しい墓に納め」とも記されています。彼は「アリマタヤ」と言う地方から（アリマタヤというのは高い所という意味ですから山奥の田舎からといったニュアンス？）、エルサレムにやって来て、議員になり、高い地位にまで上り詰めたのです。そこで、自分の死んだ後の備えとして、土地を買って新しく墓を造ったのです。その自分の新しい墓に主イエスの遺体を納めたのです。自分が入るべき場所に主イエスを納める。しかも、それは律法によれば、「木に架けられて死んだ者は呪われた者」とされます。そのような呪われた遺体を自分の墓に納めるということは、いくら議員は律法に忠実に従うべきだと言っても出来ることではありません。そのような状況の中でこの人が、主イエスの遺体を引き受けたのは、43 節にある「みずからも神の国を待ち望んでいた人であった。」ということにつきます。この人は心から神様の救いを待ち望んでいた人なのです。そして、主イエスが、その神の国が来たことを告げる救い主であることを心の中に受け

入れていたのです。十字架の死においても、その思いは変わることはありませんでした。むしろ十字架の死を目撃したことによって一層その思いは強められたかもしれません。ですから十字架の後、真っ先に主イエスを引き取ったのです。弟子たちもついてきた群衆もすべて主イエスの下を去ったという中、主イエスは一人の神の国を待ち望む議員によって埋葬されたのです。ここにも神様の救いのご計画の偉大さが表されていると言えます。

キリスト者にとって、主イエスの十字架と復活が、信仰の中心であることは言うまでもありません。しかし、十字架の後、すぐに復活があるのではありません。十字架から直接復活に結びついたのではなく、十字架の次に墓の中に納められたのです。ハイデルベルク信仰問答に「なぜ主は葬られたのですか」という問いがあります。その問いに対する答えは「まことに死んでしまった、ということを、証しするためです」とあります。つまり墓に葬られるとは主イエスは本当に死なれたことを意味しているのです。もちろん、主イエスが息を引き取ったのは、十字架の上です。しかし、その後、墓に入れられることによって、主イエスの死が紛れもない事実であることがはっきりとしたのです。主イエスが墓に納められたということによって、主イエスは、仮死状態から蘇生したのではなく、神様なのだから死についても特別な方法を持って過ごされたということでもなく、完全な死の中に身を置かれたということがはっきりしたのです。

実はそこにこそ、私たちにとっての大きな救いの恵みがあると言えます。主イエスが墓に納められたということは完全に死なれたということです。それは主イエスは、完全に、私たちと同じ者となって下さったのであり、私たちの受ける苦しみを全て知って下さっているということでもあります。主イエスは神の子でありながら、私たちと等しく肉を取り、人間と同じく肉体をもってこの地上を歩まれました。確かに主イエスは、私たちと同じ人として世を歩まれたということは恵みです。しかし、考えてみると、その歩みは、私たちの地上の歩みとは、あまりにもかけ離れてると言えるのではないでしょうか。その誕生において主イエスは処女マリヤから生まれました。又、地上を歩まれた時も、神の子として、力強く福音を語り、奇跡的な御業、奇跡を行いながら歩まれたのです。更には、その死の場面においても、十字架という苦難を身におい、その苦しみに耐えながら死んで行くことによって神の救いの御業を成し遂げられたのです。これらの姿は、どれも、食べたり、眠ったりと生活においては同じように過ごしながらも一般的な私たちの地上での歩みとは大きく異なっていると言えます。そこから生まれるのは、主イエスは、肉体を取られているものの、神の子であり、私たちとは根本的に異なるお方だと言うことです。確かに、主イエスは私たちとは違います。しかし、そのような主イエスが、その十字架の後に墓に納められたのです。そのことにおいて、主イエスは、確かに、私たちと同じ者となり、私たちの経験することを経験されたということがはっきりとしているのです。

私たちは、墓に葬られるということにおいて死と向かい合います。それは、悲しみの時、苦しみの時です。現代の私たちにとっては、埋葬の時というより、火葬場で遺体が灰になるのを見た時に人間の死をはっきりと認識すると思います。時がいつであるかは様々ですが、いずれにしても、私たちは、私たちに対する死の力が支配する、死が私たちを飲み込む苦しみの時を経験するのです。47 節には、この人間の苦しみが描かれていると言って良いでしょう。「マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスの納められる所をよく見ていた。」とあります。「よく見ていた」とは「じっと見つめていた」ということです。この二人の女性は４１節によれば、「イエスがガリラヤにおられたとき、いつもつき従って仕えていた女たち」であり、主イエスの十字架刑の一切を目撃した女たちでした。その二人のマリヤが、主イエスの葬り

を終えた後、大きな石で塞がれた墓の入り口を、そこに主イエスの遺体が横たわる墓の入り口をじっと見つめ、立ち去れないままに、立ちつくしているのです。その姿に二人のマリヤの言い知れぬ悲しみと絶望感、無力感の深さが示さられていると言って良いでしょう。死の現実の前で絶望し、どうすることも出来ずに立ちつくしているのです。墓は私たち人間が地上に生きていたことの証しです。しかし、一方で、墓は、その人の死をはっきりと証しするものでもあるのです。それ故、そこは、深い悲しみの場所となるのです。墓での深い悲しみ、それはあらゆる関係から切り離される、愛する者たちからも、神からも切り離されると思わずにはいられないという所にあるのです。

主イエスが埋葬された、主イエスが完全に死なれたという事実は、主イエスがこの苦しみの中に身を置いて下さったことをはっきりと示しています。主イエスは地上で、神の子として、神さまの御業を行われました。その中心である十字架は、私たちの罪に対する裁きを代わって身に負い、神からの裁きをご自身の身にお受けになるという出来事です。主イエスの十字架の苦しみは、ただ残虐な刑罰によって肉体的な苦痛を味わったというのではなく、神の子が神に見捨てられ、呪われた者となるということにこそ、本当の苦しみがあります。私たちが受けるべき裁きとしての死は主イエスが変わって受けて下さっているために、私たちはその苦しみを味わう必要はありません。主イエスの十字架によって全ての罪が贖われています。そのような意味で十字架の死こそ、私たちの慰めです。更に、続けて、主イエスは墓に納められました。主イエスも墓に納められたが故に、私たちが体験する死をすべて体験して下さり、私たちが葬られた後、おもむく所にも主イエスが身を置いて下さっていることが示されています。死を迎えてもそこには、主イエスがおられる。その闇の力を破り主イエスが復活されたということにおいて、確かにそこにも光りが差し込んでいるのです。マルコによる福音書は、主イエスの埋葬を語った後、続く１６章で、主イエスの復活について語ります。そこにおいて、ただ、墓の石が転がしてあり、中が空だったということが記されているのです。つまり、墓の中に身を置かれた主イエスですが復活され、その墓は空の墓となったのです。十字架の死において示された救いが、主イエスの埋葬と、墓からの復活によってよりはっきりと、私たちに救いの出来事として明らかにされたのです。私たちは誰しも、墓に葬られます。しかし、主イエスの救いにあずかる者は、そこが最終的な居場所ではないことを知らされます。墓という、絶望の極み、私たちを最終的に支配する死の力の象徴は、主イエスが、そこに身を置き、そこから復活されたということにおいて、救いの恵みがあふれる場所となったのです。

神の国、神様の救いの御支配が、真に実現したのは、主イエスの復活によって、罪と死の力が滅ぼされることにおいてです。主イエスの十字架の死と葬りが完全にあってから復活がありました。ですから主イエスの死は、永遠の命への導き手の死です。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」コリント第一 15 章 20 節　「みずからも神の国を待ち望んでいた人であった。」という望みは空しく過ぎ去ることはありませんでした。このヨセフは、主イエスの復活の時、主イエスを納めた自分の墓が空になっていることを見て、誰よりも喜んだのではないでしょうか。自分の終の棲家として用意した場所に主イエスを納めた。その結果、そこが空になっていたのです。彼はもはや、死は自分自身を支配しないということをはっきりと示されたのです。私たちも主イエスの十字架の遺体を自らの内に納めたヨセフのように、十字架の主イエスを自らの者として受け入れたいと思います。その時に、主イエスの救いの恵みが、私にも確かに及んでおり、救いの希望に満たされることになるのです。祈ります。